

2017年10月15日聖学院大学聖日礼拝説教

「接ぎ木された枝」

ローマの信徒への手紙 11：13-24

菊地 順

今朝紐解いています聖書の箇所は、ローマの信徒への手紙第11章です。前回の説教では、その1節から12節までを学びました。そこには、神の民であるユダヤ人が、その不信仰のゆえに神から退けられたこと、しかし、その中から「残りの者」が起こされ、残りの者たちによって神の救いの業が成し遂げられていくことを学びました。しかも、それは、不信仰に陥ったユダヤ人たちを取り込んでいく救いとして展望されていました。

この書簡を書いたパウロは、同胞のユダヤ人たちの救いを心から願った人です。自らは、13節に記されているように、「異邦人の使徒」と自認していましたが、さらに14節で、「何とかして自分の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです」と語るように、同胞への熱い思いを持っていました。そして、このところでも、異邦人たちの救いが、同時に、ユダヤ人たちの救いともなっていくとの展望を持っています。すなわち、15節以下で、こう述べています。「もし彼らの捨てられることが、世界の和解となるならば、彼らが受け入れられることは、死者の中からの命でなくて何でしょう。麦の初穂が聖なるものであれば、練り粉全体もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです」と語っています。実は、この箇所は、色々な解釈が可能なところであって、たとえば「初穂」についても色々な説があります。しかし、明確なことは、初めの者が聖であれば、残りのものもみな聖となるということです。この「初穂」という言葉を救われたキリスト者と理解するならば、それによって全体が聖とされ、救われるということで、ユダヤ人も含めて、すべての者の救いが語られていると言えます。そのようにして、パウロは、神の民であるユダヤ人の救いを展望するのです。すなわち、パウロは、ユダヤ人は、たとえ罪に陥り、神から見放されたとしても、そこから救われた異邦人に対するねたみを起こして、神の民に立ち帰って行くと言っているのです。そして、元々は神の民であるゆえに、それは十分可能であると確言するのです。

ところで、今日の聖書箇所では、パウロは、このことをオリーブの木にたとえて語っています。17節でこう語っています。「しかし、ある枝が折り取られ、野生のオリーブであるあなたが、その代わりに接ぎ木され、根から豊かな養分を受けようになったからといって、折り取られた枝に対して誇ってはなりません

ん。誇ったところで、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです」。ここで異邦人は、野生のオリーブの枝として描かれています。それに対し、ユダヤ人は本来の木から折り取られた枝として描かれています。本来の木とは、24 節では、「栽培されているオリーブの木」と語られています。栽培されているよいオリーブの木の枝として、ユダヤ人は存在していたのです。しかし、不信仰のゆえに罪に陥り、その結果、そのよいオリーブの木から折り取られてしまったのです。そして、それに代えて、野生のオリーブの枝であるあなたがた異邦人が接ぎ木されたのだとパウロは語るのです。だからまた、誇ってはならないと語るのです。そして、続けて、こう語ります。「すると、あなたは、『枝が折り取られたのは、わたしが接ぎ木されるためだった』と言うでしょう。そのとおりです。ユダヤ人は、不信仰のために折り取られましたが、あなたは信仰によって立っています。思い上がってはなりません。むしろ恐れなさい。」

ここでパウロの語りかけは、同胞のことから、直接異邦人に向けて語られたものとなって行きます。パウロは、信仰によって救いにいたった異邦人に対し、あなたがたは、接ぎ木された枝であるに過ぎないのだから、誇ってはならない、また思い上がってはならない、むしろ恐れなさいと語るのです。そして、22 節後半から、こう警告を発しています。「もしとどまらないなら、あなたも切り取られるでしょう。彼らも、不信仰にとどまらないならば、接ぎ木されるでしょう。神は彼らを再び接ぎ木することがおできになるのです」。パウロは、信仰によって救いに与った異邦人も、もしその信仰にとどまらないならば、その木から切り取られてしまうだろうと警告するのです。そしてまた、逆に、折り取ら得てしまったユダヤ人も、もし不信仰にとどまらないで信仰に立ち帰るならば、再びその元の木に接ぎ木されるだろうと語るのです。そして、最後に、こう語っています。「もしあなたが、もともと野生であるオリーブの木から切り取られ、元の性質に反して、栽培されているオリーブの木に接ぎ木されたとすれば、まして、元からこのオリーブの木に付いていた枝は、どれほどたやすく元の木に接ぎ木されることでしょうか」。ここでパウロは、再び、同胞のユダヤ人に言及します。それは、ユダヤ人たちも信仰に立ち帰れば、元の木に接ぎ木されるだけではなく、それは、異邦人が接ぎ木されたよりも一層簡単に接ぎ木されるだろうと言うのです。というのも、ユダヤ人は、元々その木につながっていたものだからです。逆に言えば、異邦人は、ユダヤ人以上に、しっかりとその信仰にとどまらなければならないのです。なぜなら、接ぎ木されたその木は、元々の木ではないために、簡単に離れてしまうことが起こり得るからです。だからこそパウロは、よい木に接ぎ木されたことをむしろ恐れなさいと語るのです。そして、感謝を持ってしっかりと接ぎ木された木につながりなさいと語るのです。

ところで、このパウロの接ぎ木の話は、聖書のこの箇所には留まるものではありません。実は、日本では、もう少し違った仕方で議論されることのある、ある意味では、非常に重要なテーマであるとも言えます。唐突ですが、皆さんは、新渡戸稲造という人をご存じだと思います。今の 5 千円札の肖像は樋口一葉ですが、その前は新渡戸稲造でした。新渡戸は、第一次世界大戦後に成立した国際連盟の事務次長になり、国際的に活躍した人です。また、ご存じのように、新渡戸は札幌農学校の 2 期生として入学し、そこでクラーク博士の残した影響の中でキリスト者になり、その後アメリカ留学中にクエーカーの信仰を持ちました。そして、この時に出会ったメリーというアメリカ女性と結婚し、帰国しますが、その後しばらくして与えられた息子が亡くなってしまおうという悲しみに遭遇します。そのため体調も崩してしまい、そこで静養のためにアメリカでしばらく過ごすこととなりますが、そのとき 1 冊の本を書きました。それが、大変有名になった『BUSHIDO』という本です。これは、日本人の精神を初めて世界に紹介した本として高く評価され、多くの言語に翻訳されましたが、実は、この本の中で、新渡戸はパウロが語った接ぎ木の話をしているのです。

そもそも、この『BUSHIDO』という本は、新渡戸がドイツに留学していたとき、そこで出会ったベルギーの法学者ド・ラブレーから、日本の学校には宗教教育がないとのことだが、それではく道德教育はどのようにほどこされるのかと尋ねられ、答えに窮したことに端を発しています。その後、新渡戸は、この問いを自問自答する中で、武士道という考えに思い及んだのです。そして、それを英語で『BUSHIDO』としてまとめ、1900 年に出版したのです。ちなみに、この本には「日本のこころ (Soul of Japan)」という副題が添えられています。新渡戸は、この本を少しずつ改訂しながら、5 年後に最終版の第 10 版を出しますが、この中で、武士道を 17 の章に分けて論じています。そして、その中で、「廉直 (義)」とか「勇気」とか「仁」とか「礼」「誠実」「名誉」といった項目を論じていますが、そのどれ一つを取っても、今のわたしたちにもよく分かる日本人の精神性が論じられていて、武士道が現代人にも無関係ではないこと、それどころか現代人も未だ深く武士道の精神の中を生きていることを思い起こさせられます。そのため、言ってみれば、この本は、日本人の心情・精神を映し出す鏡のような書物なのです。その意味で、この本はとてもすぐれた書物ですが、キリスト者の立場から見て、この書物のより大切な点は、新渡戸がそうした武士道をキリスト教と結びつける発言をしていることあります。すなわち、新渡戸は、武士道にキリスト教を接ぎ木することによって、双方が強められ、その精神が生かされていくと語るのです。たとえば、こういった具体例を語っています。「背教の道へ落ち込んでいるキリスト信徒があつて、牧師のどんな説得も墮落傾向から彼を救うことはできなかつたが、彼が一旦その<主>

に忠義、誠実を誓ったのではないかと訴えられると、墮落の道から元の信仰に立ち戻った。『忠義』ということばが、生温くなるままであった気高い一切の感情を再生させたのである」(佐藤全弘訳『武士道』234頁)。新渡戸は、日本人のキリスト者が背教の道に落ち込んだとき、牧師の説得は功を奏さなかったが、その人に対し、あなたはキリスト教の神、主に対し「忠義」「誠実」を誓ったのではないかと訴えたところ、元の信仰に立ち戻ったと言うのです。そうした眠っている武士道に火が付けば、その信仰も活性化され、元の信仰に立ち戻ることができたと語るのです。そのように武士道に接ぎ木されたキリスト教は、相互に強めあい、高め合っていくことができると言うのです。そしてまた、新渡戸は、それは日本に限らず、どの国にもそうした武士道に相当する「神ご自身の御手で書かれた、人類の一般史の一ページ」があると言うのです。ちょうど、新約聖書に先立って旧約聖書があるように、そうした接ぎ木されるべき木があるというのです。そして、日本では、それは紛れもなく武士道であると語るのです。

これは、なかなか面白く、ある面説得力がある話ではないかと思えます。わたしたちは、日本人であることを変えることはなかなかできないことです。＜ああ、やっぱり自分は日本人だな＞と思う経験をしたことがある人は、少なからずおられると思います。そうであるならば、その日本人を作っている、しかも世界にも誇れるような武士道の精神を生かし、それにキリスト教の精神を加えたら、さぞかし素晴らしい精神・道徳が生まれてくるだろうと考えるのも、自然のことかも知れません。しかし、それは、果たして正しいことでしょうか。そしてまた、それは、キリスト教の信仰に立ち、それを生きることになるのでしょうか。わたしは、それは疑問だと思えます。確かに、わたしたちの精神状況には、新渡戸が語った武士道が未だ残存し、影響を及ぼしているかもしれませんが。しかし、そこにキリスト教を接ぎ木しても、それはキリスト教にはなっていないのではないのでしょうか。むしろ、それは、武士道に立ち帰り、大和魂を礼賛する生き方へと戻ってしまうことになるのではないのでしょうか。そして、何よりも、問題なのは、それはパウロに教えに反するということです。パウロは、接ぎ木されたのは異邦人であると語っています。それは、キリスト教ではないのです。わたしたち異邦人こそ、キリスト教に接ぎ木される枝であって、接ぎ木されるのはキリスト教ではないのです。わたしたちは、キリスト教にしっかりと接ぎ木されて、その木から十分に養分を得て行かなければ、本当のキリスト者とはなっていないのです。

ところで、今年は繰り返し語られているように、宗教改革 500 周年の年です。今年は、その精神をもう一度見つめ直す機運にあふれていますが、その精神とは、先週の教会全体修養会でも学びましたように、源泉に立ち帰ることです。これは、当時の人文主義の精神でもありました。人文主義にとって立ち帰るべ

き源泉とは、古代のギリシャとローマの文化でした。しかし、キリスト教にとっては、それは聖書でした。当時の、当代随一の人文主義者と言われたエラスムスは「源泉に帰れ」と主張し、自らは人文主義者としてギリシャ語の聖書を研究したのです。そして、それを校訂し、出版したのです。そして、そのギリシャ語の聖書を、今度は宗教改革者となったルターがドイツ語に翻訳し、人々が直接聖書を読めるようにしたのです。そのため、しばしば、「エラスムスが卵を産み、ルターがそれを孵した」と言われるのです。そのようにして、宗教改革は、何よりも、キリスト教の源泉に立ち返ることをその精神としたのです。そしてまた、そう主張しただけではなく、何よりもルター自身が、熱心に聖書を読んだ人でもありました。ルターはエルフルト大学での学びのあと、アウグスティヌス派の修道院に入りますが、そこで徹底して聖書を読みました。特に、詩編を繰り返し読みました。読んだというより、読まされたと言った方が正しいかもしれません。というのも、アウグスティヌス派の修道院では、毎日詩編を読むことが定められていたからです。すなわち、修道士たちは、毎日朝の3時から夜の9時まで、3時間ごとに、日に7度「定時の祈り」（定時禱）というのがあり、そこで詩篇を繰り返し唱えたのです。そのため、詩編は全部で150編ありますが、1日7回の祈りで50編ほどを唱えることになります。そのため、1週間で2回、詩編のすべてを唱えることになるわけです。そして、これを毎週繰り返したのです。それは、正に「詩編漬け」の日々であったと言えます（以上、徳善義和『マルティン・ルター—ことばに生きた改革者』岩波新書、20頁）。そのようにして、徹底して詩編に親しむ中で、ルターは、聖書が語る福音の本質を学びとって行ったのです。そして、それが後の宗教改革の原動力となったのです。

すなわち、ルターは、言ってみれば、聖書に接ぎ木されたのです。キリスト教の源泉である聖書にしっかりと立ち返り、その世界に深く沈潜して行ったのです。そして、そこから活ける命を得て行ったのです。逆に言えば、ゲルマン精神に聖書を接ぎ木することはしなかったのです。もしそういうことをしていたならば、聖書を新しく読み解き、そこから福音を再発見することはできなかったのではないのでしょうか。そして、宗教改革も起こらなかったのではないのでしょうか。しかし、ルターは、伝統的なゲルマン精神に聖書を接ぎ木するのではなく、自らを聖書にしっかりと接ぎ木したのです。そのことが大切なのです。そして、それはまた、わたしたち日本人にとっても同じなのです。わたしたちは、武士道の精神にキリスト教を接ぎ木してはならないのです。キリスト教にこそ、わたしたちを接ぎ木しなければならないのです。そして、ルターの例に倣って言うならば、わたしたちも聖書にしっかりと接ぎ木されなければならないのです。聖書にしっかりと接ぎ木されて、その豊かな養分を存分に吸収して

いかなければならないのです。そして、それこそが、正しいキリスト者の生き方なのです。ですから、接ぎ木されるのは、あくまでもわたしたちであって、決して聖書ではないのです。わたしたちに聖書を接ぎ木するようなことがあってはならないのです。

しかし、現実はどうでしょうか。意外とわたしたちは、わたしたちに聖書を接ぎ木する愚を犯してはいないでしょうか。聖書から<いいところ取り>をしてはいないでしょうか。自分に心地よいみ言葉しか聞いていないのではないのでしょうか。困った時に応えてくれる御言葉ばかり探して、聖書全体に聞くことを忘れていないのでしょうか。もしそうであれば、それは、聖書を自分に接ぎ木していることであって、自分を聖書に接ぎ木していることにはならないと思います。<いいところ取り>の聖書の読み方は、結局は、自分の求めが満たされていけば、それ以上聖書を読まなくなります。また、逆に、聖書が自分の求めに応えてくれないと思うようになると、信仰すら失ってしまい、教会を去って行くことになります。日本人のクリスチャンの平均寿命は数年だと言われています。洗礼を受けても、数年たつと、教会に行かなくなってしまうのです。それは、おそらく、初め自分が求めていたものとは違ったというような経験をするからではないでしょうか。しかし、それは、キリスト教を自分に接ぎ木しようとするからであって、それがうまくいかなくなると、その接ぎ木しようとしたキリスト教を捨ててしまうのです。そして、相変わらず、元々の木である自分だけが残るのです。そうであっては、一行にキリスト者は誕生して行きません。それは、根本において、間違っているからです。接ぎ木されるのは、キリスト教や聖書ではなく、わたしたちなのです。わたしたちこそ、キリスト教に、そして聖書に、しっかりと接ぎ木されなければならないのです。そのためにも、わたしたちは、聖書の全体をしっかりと読み、それに聞き従って行かなければならないのです。

聖学院教会では、今、3人の牧師は、それぞれ講解説教を行っています。東野先生は使徒言行録、柳田先生はガラテヤの信徒への手紙、わたしはローマの信徒への手紙です。それは、選り好みせずに、まんべんなく聖書の御言葉に聞くことを目指しているからです。そのようにして、聖書全体に耳を傾けることが大切なのです。そして、それは、一人ひとりの日々の聖書の読み方においても同じだと思います。誰にでも好きな聖書箇所があります。赤線が引かれた箇所も多くあると思います。しかし、そこだけ読んでいてはならないのです。聖書は、66巻全体で聖書であるのです。そこには、あまり聞きたくない厳しい言葉もあります。また、分かりにくい言葉もあります。あるいは、名前ばかり出てきて、辟易させられるところもあります。しかし、そのすべてを含めて聖書なのです。その全体から、聞き取って行くことが大切なのです。そのようにして、

聖書にわたしたち自身を接ぎ木していくことがなければ、わたしたちはキリスト者として成長して行くことはできないのです。

パウロが語ったように、わたしたちこそ<接ぎ木されるべき枝>なのです。決して、キリスト教や聖書ではないのです。聖書を読み、しっかりとキリストの福音に接ぎ木されて、キリストに従う歩みを、これからも力強く前進させて行きたいと思います。